

方正日本人公墓への思い

木村直美（理事）

私が初めてハルピン市方正県にある日本人公墓と中国養父母公墓の存在を知ったのは、「ハルピン市方正地区支援交流の会」の会長・故石井貫一氏のお手伝いを始めた平成6、7年のことである。

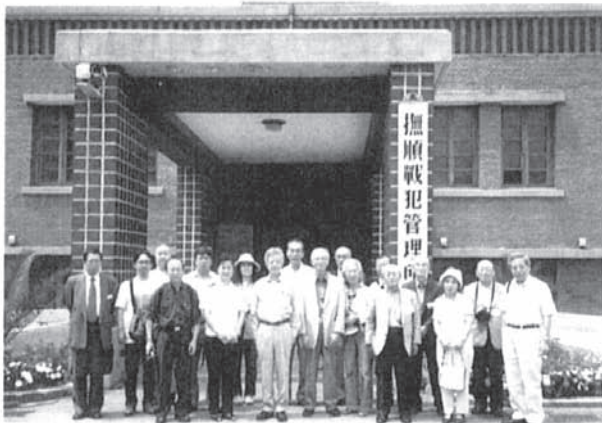
日本に痛めつけられた中国の人々が、当時決して豊かでない中で日本人の孤児を養い、5千人ほどの死者の遺骨を集め、墓を作り今もその整備管理を行っているという。それを聞いて、我々日本人が同じ状況下におかれた時に果たして同様の行動が出来るだろうか、という思いを深くしたことだった。

それから10数年、今回「友好の原点を歩く」訪中団に参加し、旧満洲時代に日本の残した負の遺産ともいべき史跡を視察した。

この旅で思ったのは、人間は集団になって、ある方向性を与えられると、平和な世界であっては考えられないような残虐な行為も平気で出来るということである。

狂ったような集団の状況下、個人の感情はどのようになってしまったのか。集団のもつ怖さと虐げられた人びとの対応の多様さ、特に撫順戦犯管理所における戦犯に対する寛大な措置、そしてこれらの施設を案内する日本語の堪能な中国人ガイドの心の内はいかばかりかと思う。

このような事実を胸に刻み、方正の日本人公墓に関わっていきたいと思う。



撫順戦犯管理所前で記念写真を撮る

溥傑さんの瓢箪池

大類善啓（理事・事務局長）

この6月に開いた第4回「方正友好交流の会」の総会で、珍しく若い女性がいたので気になっていたら、彼女が愛親覚羅溥傑とひろ夫人のお孫さんであることがわかった。

後日、福永典子さんに会って話を聞けば、典子さんは28歳。祖父の溥傑さんが亡くなった時は14歳。とても可愛がってもらったという。

典子さんは今、中国と向き合ってみようという時期に来ていて、中国語も学び始めた。そんな時でもあり、知人の大学教授の誘いで方正の総会に出席されたのだった。

7月には撫順の戦犯管理所を訪問することを彼女に告げると、溥傑さんが所内に瓢箪型の池を設計されたという。それが残っているなら写真を撮ってきてお見せしようという話になった。

撫順戦犯管理所は、「鬼」といわれた戦犯たちが自らの加害責任を痛感、人間性を回復し、「撫順の奇蹟」と言われた場所だ。

改装中だったが、侯桂花所長は我々の意を汲んでくれ、土曜日にも関わらず4時間に亘って所内を隈なく案内してくれた。瓢箪池もそのまま残っていた。

侯桂花女史は、溥傑さんのお孫さんの来訪を歓迎するので、その旨彼女に伝えてくれと言われた。いずれ典子さんは撫順戦犯管理所を訪問することだろう。「撫順の奇蹟」が、新たな世代に伝えられていくのは嬉しい。



溥傑さんが設計した瓢箪池